

ヒガンバナ考察

本年のヒガンバナは、お彼岸の入りと共に花をつけ、彼岸の中日には、ほぼ満開に近い状態で、常楽寺の境内を赤くそめて、大勢の人たちに楽しんでもらいました。

読売観光バスの二人行様や、近畿ツーリストの団体さん方も、花の丁度良い時に訪れて、花を楽しみ境内の散策を楽しんでくださいました。

中でも境内あちこちでカメラを構えるカメラマンの姿も多く、早朝の早い時間から日の沈んだあとも、フライトを照らしながら撮影を続ける人の姿も見られました。

そればかりではなく、撮影された花々の「コウレイバナ」とか「シコクバナ」とかと呼んで、大変嫌われていました。

『ヒガンバナが日本にきた道』(一九九八年、海青社刊行)の著者有園正一郎氏によると、ヒガンバナは稲づくりの技術と共に、縄文時代晩期に、中国の長江下流域から直接日本に伝えられた植物で、この花が古くから自生している所は、早い時期から農耕文化が定着した地域だと考えられるということです。

また、ヒガンバナには種子を結ぶものと、種子を結ばないものがあり、日本に伝えられたヒガンバナは種子を結ばないもので、球根は人の手で持ち運ばれて繁殖して来たと考えられます。

画像をインター

ネットに投稿されて、

撮影した画像を互いに

競っている様子も感じられます。

皆さんも一度インターネットを開いてみませんか、「太田市常楽寺」でも、たくさん画像を見ることが出来ますが、「太田市ヒガンバナ」でも、或いは、それぞれのサイトを開いても見る事が出来るでしょう。

それにしても、住職の少年時代には、「ヒガンバナ」を「シャンボンバナ」と呼んで、花が咲けば「しの棒」を振り回して、花の首を切り落としてチャンバラ気取りで快感を楽しんだりしたものです。

所によっては、此の花を「シントバナ」とか

しかし、今時代が変わって、今日では各地でヒガンバナが咲いたとニュースで取り上げたり、テレビや新聞で報道されると、大勢の人達が見物に訪れるようになりました。

常楽寺では、今から四十三年前最初の本堂が建立されたあと、墓地の整理事業が行われて、お檀家の皆さんが、ヒガンバナの球根をほりだして、捨ててしまったものを、家内と二人で境内に移し植えたものです。それが、平成十年に出版社「小学館」が発行した週刊誌「花めぐり」で常楽寺のヒガンバナを大きく取り上げてくれましたが、それが縁で「東国花寺百ヶ寺」にも誘われて今日に至りました。

